「どう生きるか」から考えるACP ▸▸11

尊厳を守るには

――日ごろから思いを共有する大切さ

患者さんの権利として、主体的に医療を選択するようになってきました。ですが、自らの死についても、主体的に考える方は、まだまだ少ないのではないでしょうか？

今回は、東西支部のTさんのご紹介により、友の会の会員で、緩和ケア病棟開設からの協力者でもあるMさんにインタビューをしました。Mさんは以前、長尾知宏先生の講演会に参加されたことで公益財団法人尊厳死協会に入会されており、自律的な「生」の延長線上として、「死」もまた、自らの判断を下す場面があるという体験をお話しくださいました。

「尊厳死」とは、人生の最終段階において過剰な延命治療*をしない（不開始）、もしくは中止して、自然な経過に任せた先にある死のことを指します。重要なポイントは、早期から十分な緩和ケアを提供するという点です。決して、〝何もしないこと＝尊厳死〟ではありません。

＊延命治療
延命を目的とした治療。人工呼吸器や胃ろうの設置、点滴など。

Mさんの手作りぶどう大福

夫の代理意思決定者として

Mさんのご主人は、スポーツマンで読書家、映画もお好き。定年退職後、ご夫婦お二人で旅行に行き、人生を楽しまれている矢先でした。

T子「Mさんのご主人は、事務のお仕事を長年してこられ、きっちりした性格だったんですね」

Mさん「そうなんです。そんな夫が、こんなこと忘れるはずがないと思うこと（シルバー人材センターのお仕事）を忘れてしまうことがありました」

T子「なんとなくおかしいと思われたのですね」

Mさん「それで私が受診をすすめて医療機関を訪れたところ、『隠れ脳梗塞だ』といわれました。そこから抗凝固剤の服薬など、治療が始まりました。しかし、半年の間に急激に病状は進み、徘徊も始まり、GPSを頼りに探すこともしばしば起こりました。最初、自覚症状はなかったところから、薬も飲めなくなりました。また脳梗塞だけではなく、他の疾患の精査で入院しました」

T子「目に見えないところでは、病状が進んでおられたのですね」

Mさん「そうなんです。一時は、回復の見込みがなければ、積極的な治療を望むかどうかを問われ、私が代理意思決定者として『積極的な治療を望まない』というサインをしました」

T子「コロナ禍では大変だったのでは？」

Mさん「急性期の治療の後、療養施設に移ってからも感染予防のため、面会は限られていました。脳梗塞の後、てんかん発作があり、意識がなくなったこともありました」

T子「そうすると、ご主人はご自身の治療について、自分で決定できない状態になられたんですね」

Mさん「そうなんです。面会もできないし、主治医や担当看護師とも会うことも、なかなかできない状況でした」

T子「クラスターが出ると、医療機関も治療と感染の対応に追われましたからね」

Mさん「私は、夫や家族の治療に対する考えを文章にしました。そして医療者とは、電話で話すことができました」

T子「なかなか思いを文章にするのは大変ですが、すごいですね」

Mさん「その電話の最後に、『気持ちが変わられたら、ご連絡くださいね』と言われました」

選択は二つ以上で決めても変更可能

嬉しいことに療養先より、「様子を見ていると、ご主人はまだまだ人生を楽しめると思われます。積極的な治療を望まないということの撤回をされてはどうでしょうか？」と言われるまでに回復され、「現在は特別養護老人ホームでの生活をされている」と話してくださいました。

「娘は、『初期治療に違った選択をしていたら…』という気持ちを持っているようですが、私の中では後悔はありません。自分たちの中では、その選択は納得がいくものだったからです」――その言葉がとても印象的でした。

（ペンネーム　T子&Tigra）

ACP（Advance Care Planning）
将来の変化に備え、将来の医療及びケアについて、本人を主体に、そのご家族や近しい人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、本人による意思決定を支援するプロセスのこと。

理事会報告

5月理事会〈概要〉

開催日時：5月26日（木）午後6時～8時
出席：理事　22名
　　監事　3名

〈主な内容〉

◆報告
・拡大常任理事会、各種委員会概要
・健康友の会みみはら、社保・平和のとりくみ報告
・無料低額診療の各事業所実績の報告
・2022年4月度決算概要
・新型コロナウイルス感染症の対応について報告
・鳳クリニック建て替えの計画について
・耳原総合病院　研修医募集定員について

◆協議確認事項
○定例評議員会の開催日時と議案について承認された

名称変更し、活動内容を刷新

〝周産期ファミリーケアセンター〟に

耳原総合病院 産婦人科・小児科・MSW・高砂クリニック 小児科

CWHC（Children Womens Health Care）センターとして、これまで子どもと女性に関わる診察・保健活動について、耳原総合病院産婦人科・小児科・MSW（メディカル・ソーシャル・ワーカー）、高砂クリニック小児科が、連携をとって活動してきました。しかし担当範囲が広く、十分な連携がとれなかったことと、また名称から活動内容が分かりにくかったことがあり、このたび名称を変更し、活動内容を刷新するに至りました。

今後は、周産期医療をはじめ、社会的ハイリスク妊産婦さんのケア、出産後の母児保健活動といった周産期全般にかかわる活動に従事します。従来のスタッフに加え、母性内科医師、精神科医師も加わった各専門スタッフが、連携を取りながら活動することで、これまで以上に質の高い「ファミリーのケア」につなげていきたいと考えています。